

自治会報紙面にみる高齢化した団地での生活

—東京都神代団地を事例として—

小池 高史 *

KOIKE Takashi

Life in an Aged Housing Complex Described in Community Papers Case Study of Jindai Housing Complex

During the period of rapid economic growth in Japan (1950s -1970s), many workers from the countryside moved to urban areas. Due to this, there was a lack of residential homes for such workers. In order to tackle this issue, many housing complexes were built. Today, after 40 to 60 years many of their residents have become elderly. In this paper, lives of residents in a current housing complex described in community papers was examined from the case study of Jindai housing complex, Tokyo. Annual events in the housing complex, activities of the residents' association for the elderly and complaints to other residents were focused. Lifestyles of the residents of the current housing complex is very diverse. On the other hand, activities and events which were done at home once are carried out jointly in the housing complex. They are figures of lives in current housing complexes which have been neglected so far.

キーワード：高齢者 団地 自治会報

* 日本大学文理学部

はじめに

日本の高度経済成長期（1950年代～1970年代）には、地方から都市部に労働者が大量に流入した。それに伴い、労働者が住むための住宅が都市部で不足した。住宅不足を解消するために、当時の建設省による1955年からの「住宅建設十箇年計画」によって日本住宅公団（以下、公団）が設立され、多くの住宅団地が建設された。この時期に建設された住宅団地は40～60年が経過し、入居当時若者だった住民の多くが高齢者となっており、高齢化率が日本全体の平均を大きく上回る団地も多い〔石川 2012; 小池ほか 2013〕。高度経済成長期に建てられた多くの団地は、建物の経年劣化と居住者の高齢化の「二つの老い」に直面している〔増永 2013〕。

これらの団地の建設当時には、新たな住居形態が注目され、「団地族」と呼ばれた団地居住者の生活や社会関係を解明しようとする多くの調査研究が実施された〔磯村 1964; 鈴木 1966; 森口 1966; 大藪 1966; 北原 1967; 倉石 1970〕。その後、団地居住者が徐々に高齢化していくなかで、団地住民の社会関係が取り上げられることがあったが〔桑田 1983; 玉野 1990; 安田 2007〕、建設当時に多くの調査研究で検証された住民の生活や社会関係の変化が十分に追跡されてきたとは言い難い。むしろ、TVや雑誌といったマスメディアを中心に、半世紀が経過した現在、団地は独居高齢者率の高さや住民の孤立・コミュニティの崩壊、孤立死の多発といった事象によって、再び注目されている〔中沢・結城 2008; 中沢・淑徳大学孤独死研究会編 2008; 川口・高尾 2013〕。

一方で、高度経済成長期の団地での人々の生活が、当時を象徴するものとして注目されはじめている。東京都北区に所在する赤羽台団地では、団地内の商店街の空き店舗を改装し、高度経済成長期当時の資料や日用品、家具などを展示する「団地のアーカイブ施設」とする活動が進められている。当時の赤羽台団地の生活の様子については、国立歴史民俗博物館においても展示として紹介されている〔関沢 2011〕。また、千葉県松戸市の市立博物館では、近隣にある常盤平団地の入居開始（1960年）頃の1室を再現した展示が行われている。この展示について、日本民俗学会の談話会で学芸員の青木俊也は、「昭和30年代の最新の住宅であった公団住宅2DKにおいて新しい生活を積極的に取り入れた暮らしぶりを再現している」と評価する。一方、「入居開始当初の高度経済成長期の生活の展示だけでなく、現在までの生活の変遷をトレースする視点を持つことが必要である。そこには、現在の高齢化が進んだ姿を掬い取る展示表現が必要となっている」と述べている〔青木 2010: 262〕。

つまり、団地での生活が肯定的な視点から注目されるときに想定されているのは、懐かしさとともに語られる高度経済成長期の時代のそれである。一方、現在の団地は高齢化や孤立といった否定的な視点からのみ語られる傾向にある。青木も言うように、現在の団地における生活の実態を調査し、それが団地の建設当時からどのように変化してきたのかを明らかにしていくことは、課題として残されているのである。

本稿では、東京都の神代団地を取り上げる。神代団地の自治会が発行する自治会報の記事を資料とし、神代団地自治会の事務局長への聞き取り結果を踏まえて、現在の団地住民の生活について検討する。団地の自治会報を資料として用いた研究例として、原武史による団地住民の政治意識の研究がある〔原 2012〕。原は戦後政治思想史の重要な史料として、首都圏や大阪圏に建設された大団地の自治会報を取り上げたが、民俗学の対象である一般人の生活を検証する上でも、団

地自治会報の利用価値は高いと考えられる。したがって、本稿はこれまであまり顧みてこられなかった同時代の生活資料として、団地で発行される自治会報を利用する意義を問うことにもなる。

1. 対象と資料の概要

(1) 神代団地について

神代団地は、1965年に入居が開始されたUR都市機構（公団）が管理する住宅団地である⁽¹⁾。全部で59棟からなり、東京都調布市と狛江市にまたがって建設されている。総戸数は2,092戸、その半数以上を2DKの間取りの部屋が占める。私鉄の最寄り駅から団地中央まで、徒歩10分程度の立地であり、団地の周囲も住宅地が広がっている。団地の中央には、郵便局や銀行、診療所、幼稚園、商店街とともに、自治会事務所、集会所、グラウンドが配置されている。

人口構成については、表1にまとめた。

神代団地の住民のうち、男性は47.5%、女性は52.5%である。年齢別には、中学生未満が7.0%、生産年齢人口となる高校生から65歳未満の人が53.0%、65歳以上の高齢者が40.0%である。高齢者のうちの25.1%は1人暮らし世帯である。2010年の国勢調査時点での日本全体の平均では、高齢者の割合が23.0%、高齢者のうちの1人暮らし世帯の割合が16.4%であったため、神代団地における高齢化率および独居高齢化率は非常に高い水準にあるといえる。

(2) 神代団地自治会について

神代団地における自治会は、1965年の入居開始から3ヶ月後に結成された。現在の自治会の組織は、図1に示した通りである⁽²⁾。全2,092戸の巨大な団地であるため、59棟ある号棟ごとや、4～6の号棟によって形成された12のブロックごとにも意見集約のための会議が開かれている。

(3) 神代団地自治会の事務局長への聞き取り調査

神代団地自治会の活動や自治会報について、2014年10月3日に神代団地自治会事務局長A氏に対する聞き取り調査を実施した。A氏は1965年の入居開始当初から神代団地

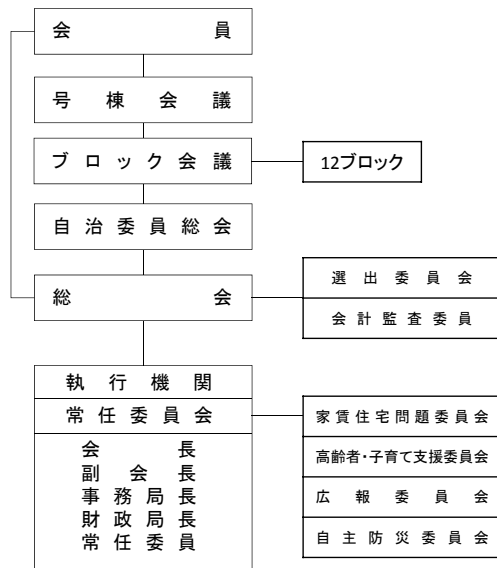


図1 神代団地自治会組織図

表1 神代団地住民の人口構成（2014年3月現在・自治会調べ・値は%）

性別	年齢	
男性	47.5	中学生未満 7.0
女性	52.5	高校生～65歳未満 53.0
		65歳以上（内、独居者） 40.0（25.1）

に居住しており、自治会役員となったのは1970年からである。2004年にはじめて事務局長となり、その後中断期間があったが、2010年以降現在まで事務局長を務めている。聞き取りは神代団地の集会所で行った。所要時間は約1時間であった。

(4) 自治会報というメディア

神代団地に限らず、団地自治会が会報を発行している例は多いが、東京都板橋区高島平団地での自治会報の利用状況を調査した先行研究によれば、若年者よりも高齢者のほうが自治会報を読んでいる割合は高く、高齢者の79.3%が日ごろから自治会報を読んでいた。若年者においても54.2%の人が読んでいると答えており〔小池ほか2013〕、団地住民にはなじみ深いメディアであると考えられる。

神代団地の自治会報は、「自治会ニュース」という名称で、2週間に1回程度の頻度で発行されている⁽³⁾。本稿の分析対象としたのは、2013年5月から2014年5月の間に発行された38部である。B4版の片面印刷であり、主な記事内容は、会議報告、行政やURからの連絡、イベントの告知、住民からの要望、自治会からの諸連絡に分類できる。同じ公団の団地である高島平団地の「高島平2丁目団地自治会報」、札幌市五輪団地の「五輪会報」、日野市多摩平団地の「多摩平の森自治会ニュース」と比較しても、記事内容に大きな違いは見られないが、神代団地の自治会報は、他紙よりも文字サイズが大きく、行間が広くとられている。これらは高齢者に配慮した工夫だと考えられる。自治会報は事務局長が必要に応じて1人で作成し、発行している。A氏が事務局長に就いた2004年当時から紙面内容に大きな変化はない（聞き取り結果より）。団地の生活を把握するためには1年間の流れを踏まえることが必要である。住民の高齢化は年々進んでおり、高齢化した団地での生活をとらえるために最近1年間の自治会報を分析対象とした。分析対象とした38部の概要は表2の通りである。

以下、神代団地の自治会報の紙面から読み取れる、団地の年中行事、高齢化を反映した自治会の取組み、「住民の声」欄に掲載された他住民への苦情に焦点をあてて、記述していく。

2. 団地の年中行事

自治会報の紙面から読み取れる自治会で主催する年中行事の一覧を表3にまとめた。会場としては、すべて団地の中央に位置する集会所やグラウンドで開催されている。雛祭りや端午の節句は日程が毎年決まっているが、その他の行事は同じ時期の週末など、曜日を基準に日程が決定し

表2 2013年5月から2014年5月の「自治会ニュース」

発行日	13/5/29	13/6/3	13/6/10	13/6/24	13/6/28	13/7/5	13/7/12	13/7/24	13/8/2	13/8/12
住民の声	なし	なし	なし	なし	あり	なし	なし	なし	なし	あり
発行日	13/8/21	13/9/2	13/9/13	13/9/27	13/10/7	13/10/11	13/10/16	13/11/1	13/11/13	13/11/25
住民の声	なし	あり	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
発行日	13/12/4	13/12/11	13/12/25	14/1/6	14/1/17	14/1/22	14/1/29	14/2/3	14/2/10	14/2/19
住民の声	なし	なし	あり	あり	なし	なし	なし	なし	なし	なし
発行日	14/2/24	14/3/10	14/3/24	14/3/31	14/4/14	14/5/2	14/5/12	14/5/23		
住民の声	あり	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし		

表3 神代団地自治会主催の年中行事

日程	3/1～3	5/5	8/17～18	9/15	10/13	12/7
行事名	①雛祭り	②端午の節句	③盆踊り	④防災訓練	⑤団地祭り	⑥餅つき
会場	集会所	集会所	グラウンド	グラウンド	グラウンド	集会所中庭

ている。1980年に長野県大町市の団地を調査した倉石忠彦は、そこで行われている年中行事や通過儀礼について、「団地外の嫁の生家あるいは婚家などとの関係によって、いわゆる伝統的社会の義理としておこなわれることが多い。しかし、いずれにしても団地全体にかかわるものより、個人もしくは家族単位の伝承のほうが卓越しているといえるであろう。そういう意味では、団地はまだまだ寄せ集めの他所者の集団である」[倉石 1983: 77]と述べているが、現在の神代団地では団地外の地域や親族との関係が薄れたことにより、年中行事も自治会が主催し、団地全体が関わるものとして実施されていることがわかる。

以下にそれぞれの行事の内容について記述する。

①雛祭りは、集会所に雛人形やその他の人形を飾り、来場者に自治会役員が作った汁粉、菓子、茶を提供するという内容であった。3月1日の午後から3日の午前まで開かれ、来場者は合計で200人程度であった。

②端午の節句の祭りでは、5月5日に集会所に兜や武者人形が飾られた。他に、割りばし鉄砲、折り紙の兜、紙鉄砲、紙飛行機の制作体験コーナーも設けられ、また菓子や飲み物の提供もあった。雛祭りと端午の節句の祭りは、2012年に住民から不要になった人形を寄付されたことがきっかけではじまった(聞き取り結果より)。家に子どもがいた頃には、自宅内に飾られていた人形を、子どもが成長し不要になったため寄付したのである。現在団地内に子どもがいる世帯は少ない(中学生未満の人口は7%)が、来場者の多さから、子どもがいる世帯でも自宅で雛人形や5月人形を用意するのではなく、団地共用の人形で代替している人が多いのではないかと推測される。

③盆踊りは、8月17日と18日の午後7時から2日間にわたって、中央グラウンドで実施された。それに伴い、1週間前に集会所で踊りの練習会、15日には盆踊りで使用するテントの設置が行われ、住民の参加が呼びかけられた。会場には、キュウリの塩もみ、味噌おでん、飲み物などの露店が10店程度出された。盆踊りは、1970年代の前半から行われている(聞き取り結果より)。舞台上の踊り手は高齢女性を中心であったが、来場者としては高齢者は少なく、子どもの姿が多く見られた。団地外の近隣地域から来ていた人や、神代団地で育ち、外に出ていった子育て世代の来場者も多いということである(聞き取り結果より)。

④防災訓練は、9月15日の午前中に中央グラウンドで実施された。災害時の安否確認を含む伝達訓練、消防署員の指導下での消火器や放水の体験訓練、グラウンド内のかまどを使った炊き出し訓練といった内容であった。当日は消防車も来ており、体験乗車も行われた。また、避難時に持っていく量の水と食料や緊急時の持ち出し品の展示もあった。防災訓練は、自治会常任委員会の1つである自主防災委員会の主催である。自主防災委員会は、1995年の阪神・淡路大震災以降に設置された委員会である(聞き取り結果より)。

10月13日に中央グラウンドで⑤団地祭りが開かれた。内容は、神輿・山車、吹奏楽やジャズバンドのコンサート、ダンスや空手の発表会、フリーマーケット、ミニSL機関車、バターゴルフ、焼きそばなどの模擬店、似顔絵コーナーなどであった。あわせて、集会所では神代団地を

む公団の団地の風景を撮影した写真展も開かれた。また、それに伴い 11 日に準備があり、住民の参加が呼びかけられた。神代団地の団地祭りは 1965 年の入居開始当時からあり、当初の内容は運動会に近いものであった（聞き取り結果より）。団地で自治会主催の団地祭りが実施されている例は他にも多い。神代団地と同じ 1965 年に入居が開始された東京都小平市の小平団地に、入居開始当時から住んでいた滝いく子は、その手記の中で夏休みの団地祭りが始まった経緯について、「子どもたちのふるさととは団地なのだから、ふるさとらしい行事をするのがいいという意見があり、ともかくも何かをしよう、という点ではめずらしく意見が一致しました。（中略）ふるさとらしくするためには、何といてもお祭りが必要なのだ、というのです」と述べている[滝 1976: 86]。団地祭りは、当初から子どものための行事であったことが示唆されているが、子どもの数が減った現在の団地においてもその点は継続されており、団地祭りでは子ども向けの催しが多く行われている。盆踊り同様、神代団地で育ち、外に出ていった子育て世代の来場者が多く（聞き取り結果より）、彼らにとっては団地がまさにふるさとになっているのだといえよう。

⑥餅つきは、12 月 7 日に集会所の中庭で実施された。参加した住民がつき、その場で販売も行われた。集会所で食べることもでき、その際には茶が提供された。餅つきは、以前にも行われたことがあったが、現在の形で実施されているのは 2010 年からである（聞き取り結果より）。雛祭りや端午の節句の祭りとともに、餅つきもかつては「家族単位の伝承」に基づいて、家庭内で行われていたことが予想される。それが世帯人数の減少や独居世帯、高齢世帯の増加に伴って、団地内で共同して実施されるようになってきているのだと考えられる。

3. 高齢化を反映した自治会の取組み

住民の高齢化や独居高齢者の増加に伴い、神代団地自治会では、高齢者向けの様々な取り組みをしていることが、自治会報から読み取れる。表 4 に、高齢化を反映し定期的・継続的に実施されている神代団地自治会の取組みの一覧をまとめた。

取り組みは、高齢者の緊急時や困りごとが生じた際に対応するサービス（あんしん登録カード・見守り訪問活動・じんだいちょこっとさん）と、高齢者が集まり孤立を防ぐことを目的としたもの（ふれあいサロン・ふれあい喫茶・居酒屋じんだい・健康づくり体操）に分類できる。

以下に取組みの内容を記述する。

あんしん登録カード（2003 年開始）は、病気やけがで体の自由がきかないなどの緊急事態が生じた際に、速やかな対応ができるよう団地の管理事務所に預けたカードで、緊急時の連絡先、鍵を預けている人、かかりつけ医、血液型、ケアマネージャーなどを登録するものである。対象となるのは、60 歳以上の夫婦世帯、1 人暮らし世帯、身体障害者である。自治会と UR が共同で

表 4 高齢化を反映した神代団地自治会の取組み

取組み名	頻度	会場
あんしん登録カード		
ふれあいサロン・ふれあい喫茶・居酒屋じんだい	各月 1 回	集会所
健康づくり体操	月 1 回	集会所
見守り訪問活動	月 1 回	
じんだいちょこっとさん		

取り組む、孤立死の防止を目的とした活動といえる。

ふれあいサロン（1994年開始）、ふれあい喫茶（1994年開始）、居酒屋じんだい（2012年開始）ともに団地中央の集会室で月に1回開かれており、いずれも高齢者を中心とした住民の交流を目的としている。ふれあいサロンは第2火曜日の午後、ふれあい喫茶は第4水曜日の昼食時、居酒屋じんだいは第3金曜日の夕方と、開催期日と時間帯が異なる。また、ふれあいサロンでは血圧測定や健康相談、ふれあい喫茶では昼食、居酒屋じんだいでは飲酒がそれぞれ可能であり、内容も異なっている。

健康づくり体操（2012年開始）も集会室で月に1回開かれる。第3金曜日の午後実施されているが、高齢者の交流と健康増進を目的とした活動である。60歳以上が参加の対象とされており、各回に転倒防止、腰痛対策、シニアの体の動かし方などといったテーマが設けられている。外部の指導員が呼ばれ、その指導の下、1時間程体操が行われる。

見守り訪問活動（2013年開始）は、75歳以上で1人暮らしをしている人のうち、訪問を希望する人を対象に月に1度、自治会の委員が家を訪問する取り組みである。安否確認とともに、訪問時に困りごとがあれば対応する。高齢者の孤立死の防止を目的とした活動である。

じんだいちょこっとさん（2013年開始）は、買い物、ズボンの裾上げ、洋服の丈直し、掃除、蛍光灯の取替、粗大ごみの運搬など、生活機能の衰えによって難しくなった作業を代行するサービスである。作業には住民のボランティアが対応し、作業が発生するごとに高齢者から依頼する。1時間以内の作業は1回500円、30分以内の作業は200円という料金が必要となる。

独居高齢者の生活支援ニーズを調査した先行研究では、独居高齢者に求められていることとして緊急時の不安の解消や見守り、交流・会話が挙げられている〔小池ほか2011〕。独居高齢者が多く暮らす神代団地においても、あんしん登録カードは緊急時の不安の解消に、ふれあいサロン、ふれあい喫茶、居酒屋じんだいは交流・会話に、見守り訪問活動は独居高齢者の見守りに、とそれぞれの取組みが独居高齢者を含む高齢者のニーズに対応する形で実施されている。団地内で高齢者の交流の場を提供する取り組みは他の団地にも例が多いが、時間帯や内容の異なる複数の交流の場を用意している点が神代団地の特徴である。団地に暮らす高齢者の多様なライフスタイルや嗜好に対応するための工夫であると考えられる。

居酒屋じんだい、健康づくり体操、見守り訪問活動、じんだいちょこっとさんは、2012年以降に開始されているが、高齢者数の増加と高齢者の転倒による怪我といった出来事が頻繁に生じたことを受けて自治会が開始したものである（聞き取り結果より）。

4. 他住民への苦情

自治会報には、「住民の声」として住民から投稿のあった他の住民への要望・苦情が掲載される欄がある。これはA氏が事務局長になった2004年にはじめたものであり、住民からの投書があった際や、号棟ごとの会議で要望が提出された際に掲載される（聞き取り結果より）。表5に、本稿で扱った期間の会報に掲載された「住民の声」の内容をすべて記載した。表5からは、団地での生活の上で特に問題となっていることとして、騒音の問題、ベランダの使用方法、団地の敷地内での行動が挙げられる⁽⁴⁾。騒音としては、洗濯機の音、広場の音、布団を叩く音、子どもによる騒音、ペットによる騒音、水道の音が問題となっていることがわかる。ベランダは各住民

表5 自治会報に掲載された「住民の声」

掲載日	他住民への苦情
2013/6/28	・ベランダの手すりに乗せている植木鉢にハラハラしています！台風や風が強い時など下に落ちるのではないかと心配です。同時に毛虫がつくような鉢植えは風で毛虫が飛んできます。窓も開けられない、洗濯物や布団も干せません。鉢植えはベランダの内側で楽しんでください。
2013/8/12	・北側の広場で早朝からテニス、サッカーなど利用者があり、音が建物に響き迷惑している。
2013/9/2	・団地内の立ち小便はやめて！現場を見かけると目をそらして通るしかなく、足早に通りますが、大変不愉快です。立ち小便は軽犯罪法に触れると思います。絶対にやめてください！
2013/12/25	・「子育て世帯も音には気を付けています」小さいお子さんがいる家庭では、部屋でジャンプしたり大声を出すのをやめよう、気を付けようと自治会ニュースの記事を見ますが、子育て世帯でも十分気を付けています。人の感じ方によって騒音に感じるのでしょうか？
2013/12/25	・「回収ごみの中身を1階フロアにまき散らしているのを目にします」人為的、しかも故意的に行われているとすれば、ごみの内容から個人情報を得ることが可能であり、プライバシーの侵害という法に背く行為です。集合住宅に居住しているため、ごみ分別にも様々な問題があることは承知の上ですが、1つ2つ、間違っただけのごみが入っていたのを理由に、個人ごみを1階フロアにまき散らすというのはいかがなものでしょうか。
2014/1/6	・昨24日（火）0:30まででした。洗濯機の音だと思います。朝は6:00台より夜は0:00まで最近よくあることです。枕を通して伝わり気になり眠れません。私は普通の聴力だと思います。集合住宅です、お互い様ですが、おかしくなりそうです！
2014/2/24	・パンパン叩く大きな音にびっくりします！ベランダで布団、毛布、マット、ジュタンなどをパンパンと強く叩いてほこりをはらっていませんか？階下はほこりをまともにかぶって迷惑しています。布団を叩くとせっかくふくらんだ繊維を切るのです、よけいに綿ほこりの原因になります。布団を叩くのはやめてください。
2014/2/24	・上階の布団、毛布、洗濯物などヒラヒラして気分が悪い！布団、毛布などを干すときに、階下まで届くほど垂らしていませんか？布団にシーツを付けたままの場合、階下にシーツの影がひらついて気分の悪いものです。少し気を付けて階下まで垂らしていないか注意してください。
2014/2/24	・ベランダからはみ出して洗濯物を干していませんか？しずくが落ちたり、落下したりして迷惑になっています。洗濯物はベランダ内に干してください。
2014/2/24	・団地内で許可されている小動物は、小鳥、金魚、熱帯魚です。犬、猫、にわとり、うさぎ等の飼育は禁止です。飼いたくても我慢している人がいることを考えてください。飼う人にとっては何でもない鳴き声や臭い、抜け毛など人によっては大変迷惑になっています。
2014/2/24	・鳩にエサをやらないうで。まだエサをやる人がいます。鳩のフンには人にとって害を及ぼす菌が含まれているそうです。干した布団の上にフンを落とされても困りますが、不潔というだけでは済まないのです。鳩にエサをやらないうでください。
2014/2/24	・コンクリートは音に敏感です。部屋の中で高い所から飛び降りたり、飛び跳ねたりしないように心がけましょう。深夜、早朝の水道音も気になるものです。強く出さないように気を付けましょう。

の私的空間と上下左右の住民のそれが交わる空間であり、そのためベランダにまつわる生活上の問題が浮上しやすいのだと考えられる。具体的には、鉢植えや布団、洗濯物の干し方が問題として生じている。その他には、団地の敷地内の路上や1階の共有フロアでの、立ち小便、ごみの扱い、ハトへのエサやりが問題として生じている。

また、先行する苦情への苦情とみることのできる内容もある。2013年12月25日に掲載された2つの内容、「子育て世帯も音には気を付けています」と「回収ごみの中身を1階フロアにまき散らしているのを目にします」からは、以前から子育て世帯の騒音やごみの分別について問題を指摘されてきたことが読み取れる。他住民の生活を問題視すること自体が、過剰な苦情として問題視されているのである。

5. まとめと考察

本稿では、団地自治会が発行する自治会報を資料とし、そこから読み取れる現在の神代団地住民の生活について検討した。神代団地は入居開始からおよそ50年の歴史を持ち、自治会もほぼ同じ長さの歴史を持っている。そのなかで自治会の存在が住民のうちに浸透し、住民の生活に

とって大きな役割を持っていることが見えてきた。盆踊りや団地祭りなどの年中行事を担っているだけでなく、住民の高齢化を反映して、高齢者の生活支援のための様々な活動を実施している。また、自治会報に他住民への苦情を投稿することは、住民同士で直接交渉したり、警察などの公的セクターを頼ったりすることの代替策として機能している。「住民の声」欄によって自治会報紙面が住民間の意見交換の場ともなっていることは、生活に密着した自治会報というメディアの特質である。

高度経済成長期に実施された団地研究では、住民の社会階層や家族構成が似通っていること〔倉石 1973〕や、住民が家庭中心の生活をおくっており周囲とのつながりが薄いこと〔鈴木 1966〕が指摘されていた。それに比べ、現在の神代団地住民の生活は、大きく多様化している。他住民への苦情のなかで問題視されていた生活騒音は、住民の生活スタイルの多様化を表している。洗濯機や水道を使用する時間のズレや、子育て世帯と高齢者世帯の混在が騒音への苦情が生まれる背景にある。一方で、かつては家庭内で行われていたことが予想される雛祭りや端午の節句の祭りや餅つきを、団地内で共同して実施するようになっている。これらは、懐かしさとともに回想される高度経済成長時代の生活の象徴という視点と、コミュニティの崩壊や高齢者の孤立化といった否定的な視点からだけでは見えてこない現在の団地生活の姿である。

自治会報は多くの住民の目に触れるメディアであるが、発行者である自治会の必要に応じて自治会の視点から作成されたものであり、団地生活のすべてを網羅しているわけではない。自治会としては紙面に掲載された呼びかけや募集に反応・応募があることから読まれていることを実感しているとのことだが（聞き取り結果より）、自治会の主催する行事や活動に参加するのは一部の住民であり、自治会報に他住民への苦情を投稿するのも一部の住民である。自治会報を資料とすることで、現在の団地住民の生活の一端を垣間見ることができたが、今後、生活者の聞き取り調査が課題である。

註

- (1) 公団の団地は 1960 年代の後半から 1970 年代の前半に最も多く建設され、その期間の計画戸数は毎年 50,000 戸以上を数えた（ピークは 1971 年の 88,000 戸）。神代団地が建設された 1965 年の計画戸数は 53,000 戸であった〔木下・植田 2014〕。神代団地建設当時は公団設立当初に比べ、2,000 戸以上のような大規模な団地が多く建設されていた時期であり、神代団地も当時建設された大規模団地の 1 つに数えられる。
- (2) 自治会の組織構成が現在のものとなったのは 1986 年からであり、それまでは広報部、福利厚生部などといった部活動制の組織であった（聞き取り結果より）。
- (3) 「自治会ニュース」という名称の自治会報は、1978 年 4 月にはじめて発行されたが、当時は 2 ヶ月に 1 度の発行頻度であり、会議結果の報告や記録を主な目的としており、内容が現在の「自治会ニュース」とは異なっていた。「自治会ニュース」は過去 3 年分のみ保存されており、現在の形式・内容の「自治会ニュース」が発行されはじめた時期や通巻号数は記録されておらず不明であるが、A 氏が事務局長になった 2004 年当時には存在していた（聞き取り結果より）。
- (4) 松崎おかりが高島平団地の住民に団地住民間の苦情について聞き取りをした結果では、水、臭い、音、ペットに関する苦情が挙げられている〔板橋区史編さん調査会編 1997: 467-469〕。

文献

青木俊也 2010 「博物館による高度経済成長期の生活変化へのアプローチ」『日本民俗学』261

- 石川 久 2012「自治会・大学—コミュニティ活性化のための協働」中沢卓実・結城康博編『孤独死を防ぐ—支援の実際と政策の動向』ミネルヴァ書房
- 磯村英一 1964「団地形成の特殊性と C.O. の指向性」『都市問題研究』16（5）
- 板橋区史編さん調査会編 1997『板橋区史資料編 5 民俗』板橋区
- 大藪寿一 1966「団地計画に関する社会的並びに建築学的研究」『社会学評論』16（3）
- 川口一美・高尾公矢 2013「団地における孤独死の発生と防止対策に関する考察—千葉県八千代市 A 団地の事例を手がかりとして」『聖徳大学研究紀要』24
- 北原龍二 1967「団地自治会の形成過程」『社会学評論』18
- 木下庸子・植田 実 2014『いえ団地まち—公団住宅設計計画史』住まいの図書館出版局
- 倉石忠彦 1970「団地と民俗」『研究集録』6
- 倉石忠彦 1973「団地アパートの民俗」『信濃』25（8）
- 倉石忠彦 1983「団地の民俗」『歴史公論』92
- 桑田敦子 1983「地方小都市における団地のつきあい関係—熊本県人吉市鶴田団地の事例」『日本民俗学』150
- 小池高史・西森利樹・堀 恭子・朝比奈千絵・長谷川倫子・宮前史子・張 弁林・許 海栄・佐野美媛・安藤孝敏 2011「民間団体による独居高齢者への支援活動の現状と課題—支援団体へのインタビューから」『技術マネジメント研究』10
- 小池高史・西森利樹・安藤孝敏 2013「都市部の団地に暮らす高齢者のタウン紙利用状況」『技術マネジメント研究』12
- 鈴木 広 1966「団地の社会学」『教育と医学』14（8）
- 関沢まゆみ 2011「高度経済成長と生活変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』171
- 滝いく子 1976『団地ママ奮戦記』新日本出版社
- 玉野和志 1990「団地居住老人の社会的ネットワーク」『社会老年学』32
- 中沢卓実・淑徳大学孤独死研究会編 2008『団地と孤独死』中央法規出版
- 中沢卓実・結城康博 2008『常盤平団地発信 孤独死ゼロ作戦—生きかたは選べる！』本の泉社
- 原 武史 2012『団地の空間政治学』NHK 出版
- 増永理彦 2013『マンション再生—二つの“古い”への挑戦』クリエイツかもがわ
- 森口兼二 1966「団地家族—大阪府枚方市香里団地の調査から」『教育社会学研究』21
- 安田節之 2007「大都市近郊の団地における高齢者の人間関係量と地域参加」『老年社会科学』28